イザヤ書の全体像

大島　　力

Ⅰ．イザヤ書―その位置と特徴

旧約聖書は、ヘブライ語原典に従うならば、大きく「律法」（トーラー）と「預言者たち」（ネビイーム）と「諸書」（ケトゥービーム）の三つに区分されている。ユダヤ教で一番重要視されているのは「律法」である。それに続くのが「預言者たち」である。それは二つに分けられ、「前の預言者たち」（ヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記）と「後の預言者たち」と区分されている。しかし、通常我々が「預言書」と呼んでいる部分は「後の預言者たち」のことである。イザヤ書はその冒頭に置かれ、預言書の中で最も重要な書物である。

イザヤ書は全66章からなり、量的にも預言書の中で最大である。また、詩編に次いで、新約聖書に引用されることが多い文書である。このことは、ユダヤ教においても、また、キリスト教においても、イザヤ書が極めて重要な位置をもっていることを端的に示している。

1）「文献のカテドラル」としてのイザヤ書

イザヤ書は「文献のカテドラル（大聖堂）」と言われる。それは、ガウディの「聖家族教会」（サグラダ・ファミリア教会）を思い浮かべてもらうとイメージが湧きやすい。ガウディは、1884年にその建築を始めたが、いまもなお建設中である。130年の時を経てもなお未完成である。（いつ完成するのであろうか？）。イザヤ書は、その書き始めから約450年経って、ようやく文献

的にほぼ固定化したと考えられている。最初期のテキストは、紀元前8世紀のエルサレムの預言者イザヤに遡ることは確かである。それは、「ユダの王、ウジア、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代」である。しかし、その後、イザヤ書は長い歴史を通して形成されていった。そして、最も新しいテキスト、つまり、イザヤ書の最終段階のテキストは、紀元前5世紀から4世紀にかけてのペルシア時代であったと考えられている（イザヤ書24－27章の「イザヤの黙示録」、あるいは66章等）。このように、イザヤ書は多くの人々によって書き継がれ、違った時代において「権威ある書物」として受け止められ、その時代において解釈され、適応されていった。

もちろん、その中には歴史的核と言いうる預言者の存在がある。まず最初に紀元前8世紀の「エルサレムのイザヤ」である。彼の召命記事は6章に記されている。次に、紀元前6世紀のバビロン捕囚末期の「第二イザヤ」と呼ばれる預言者である。その召命記事は40：6－7に認められる。そして、その「第二イザヤ」を核とした文書が40－55章の「第二イザヤ書」である。さらに、捕囚からエルサレムへの帰還後まもなくして活動したのが「第三イザヤ」と呼ばれる預言者である。その言葉は60－62章にまとめられているが、61：1－4の背後にはその召命体験があると思われる（ナザレのイエス自身が自分のこととして引用した。ルカ4章）。それを歴史的核として形成されたのが56－66章の「第三イザヤ書」である。しかし、それらがすべて「第三イザヤ」という預言者に由来するわけではなく、むしろ、実際には、バビロン捕囚からの帰還後のエルサレムの状況（6世紀末から5世紀前半）に由来する様々な文章の集合体である。

このように、それぞれの時代に由来するテキストは固有な歴史的意味を持っているが、しかし、それらのテキストは、現在のイザヤ書の全体構造の中で位置づけられ、また違った機能を持たされているのである。それは、例えば、大聖堂の一本の柱が、それが最初に建てられた当初と同じ形状であっても、全体の建築が進むなかで、その位置づけが異なり、また違った意味を完成時には持つようになるのと同様である。イザヤ書は、それと同様に、歴史的に分析すれ

ば、限りなく細分化されていくテキストの集合体であるが、しかし、その各部分は、互いに関係し合い、影響し合って、全体としてカテドラル（大聖堂）としての統一体を成しているということができる。従って、我々はイザヤ書を読む時に、その個々のテキストをきちんと把握すると同時に、建物全体（＝イザヤ書全体）を見て行く必要がある。そうしないと、「木を見て、森を見ず」ということになってしまうと思われる。

2）「第５の福音書」としてのイザヤ書

イザヤ書は「第５の福音書」と呼ばれることがある（J.F.A. ソーヤー）。それは、イザヤ書が、初代のキリスト教会の形成にとって、新約聖書の四つの福音書が果たした役割と同様に大きな、そして決定的な役割を果たしたからである。事実、初代教会においてイザヤは「預言者というよりも福音書記者として知られており」、イザヤ書は「第五福音書」として扱われていたと言う。このイザヤ書に対しての見解は過大評価だとしても、初代教会が自らの自己形成をしていく過程で、イザヤ書が大きな役割を果たしたことは疑い得ない。例えば、イザヤ書９章５節の「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子が私たちに与えられた。」という言葉は、初代教会によって「イエス・キリスト」のことを預言した「メシア預言」と受け止められていた。（後にヘンデルのメサイア　For unto us a Child is born, unto us a Son is given ...）また、イザヤ書53章の「苦難の僕の歌」は、イエス・キリストの受難を預言したものであるとされていた。さらに、先程触れたイザヤ書61章の冒頭の言葉は、ナザレのイエス自身が故郷の会堂で朗読し、「この言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と言われた箇所である。もちろん、このことはルカ福音書の文脈の中に置かれているが、歴史的蓋然性はかなり高いと思われる。なぜならば、イエスとほぼ同時代のクムラン写本のなかでも、イザヤ書61章１節は重要性を持っており、クムラン共同体の指導者も、この言葉を決定的に重要な箇所として取り上げているからである。（ちなみに、クムラン写本の中には、ほぼ完全な形でイザヤの巻物が一つ存在し、少し欠けては

いるがもう一つ巻物が残されている、その他、イザヤ書の断片も多数存在する。）イザヤ書に関して言えば、クムラン共同体と初期キリスト教会は、類似した点が多い。もちろん本質的には別ものであるが、平行現象と言えるものがある。

このように、イザヤ書は初代のキリスト教会が形成されて行く過程で極めて重要な「第五福音書」とも言うべき役割を果たしていったのである。そして、その影響力はその後のキリスト教会の歴史にも及んでいるのである。

3）「キリスト教史におけるイザヤ」

このことについては、多くを語ることは時間の都合で出来ない。しかし、有名な絵画から一つ、また、私の身近な経験から一つを例にあげよう。

少し前に、私は世界文化社という出版社から頼まれて「名画で読み解く聖書」という書物の監修をした。その中でこれは欠かせないと考えたのは、バチカンのシスティーナ礼拝堂の天井に描かれた、ミケランジェロの「預言者イザヤ」という作品である。ミケランジェロのイザヤ像は大変に威厳のある姿をしている。かなり若い青年のような顔立ちであるが、その肩にはイザヤの二人の息子が描かれている。6章の「シェアル・ヤシュブ」と8章の「マヘル・シャラル・ハシュ・バズ」である。（出版社の編集者は、これはキューピットであるということを言っていたが、おそらくそうではないであろうと言って訂正してもらった）。ミケランジェロはイザヤ書を良く読んでいたのである。ただ、小脇に抱えている大きな本と思われるものは時代錯誤的である。なぜなら、それは現在と同じ冊子本（コーデックス）の形をしているからである。紀元前8世紀であるならば、それは巻物（スクロール）でなければならないはずである。しかしにも関わらず、ミケランジェロのイザヤ像は、現代まで我々のイメージを規定していることは事実である。

もう一つは、これは少し宣伝めいているが、青山学院大学のマスコット・キャラクターのことである。それは、鷲が聖書を抱えている姿をしている。実は、私が青山学院に就任した当時、大学は学生から青学のキャラクターの募集

をしていた。そして、鷲がもうすでに候補として選ばれていたのである。鷲は、鷹と同じで「強行派」のイメージがあり、どうしたものか、と当時の宗教部長から相談を受けて、私はすぐにイザヤ書40章31節をその出典としたらよいと提案をして受け入れられたのである。「主に望みをおく人は新たな力を得、鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない」。そして、現在ではそれは、イーグルからとってイーゴ君というマスコットなっている。そしてさらに言えば、イザヤ書40章27－31節は、映画『炎のランナー』の中で、エリック・リデルが、安息日に走ることを拒否して、日曜日に礼拝堂で朗読した箇所である。エリック・リデルは、その後陸上選手を辞めて宣教師となり、第二次大戦下の中国で亡くなっている。私にとって、イザヤ書40章31節はそのようなことを連想させる箇所である。

いずれにせよ、イザヤ書はその後のキリスト教の歴史・文化に様々な影響を与えているのである。

Ⅱ．イザヤ書の「三区分」から、「統一体」としてのイザヤ書理解へ

前述したように、イザヤ書は約450年かけて現在の形になった「文献のカテドラル」である。そのような理解に至るまでの経緯を簡略に述べたい。

中世期までの通説は、1－66章全体が紀元前8世紀の「エルサレムのイザヤ」に由来するというものであった。（例外は1089年のAbraham Ibn Ezra: すでに中世のユダヤ教の学者が、イザヤ書40章以下は、紀元前8世紀のエルサレムのイザヤの作ではなく、紀元前6世紀のバビロン捕囚期に由来するとしていた）。

近代に入り、18世紀にイザヤ書40章以下は、それ以前の部分とは異なるバビロン捕囚期の無名の預言者によるものであるという説が唱えられ始めた。それ以降、近代の歴史的・批判的研究が本格化し、イザヤ書には少なくとも三つの時代に由来するテキストが存在することが指摘されるようになった。それを学問的に注解書の形で提示したのが、B. ドゥームの『イザヤ書注解』（1892年）である。

ドゥームは、1 − 39章と、40章以下を明確に異なった文書であることを確認するのみならず、さらに40 − 55章と56 − 66章も異なった時代に属するものであるとした。

このことが、現代の旧約聖書学の中で通常一般的に使われている「第一イザヤ」(1 − 39章)、「第二イザヤ」(40 − 55章)、第三イザヤ（56 − 66章）という名称の出発点となったのである。近現代のイザヤ書研究の出発点は、このドゥームの『イザヤ書注解』である。

簡略に、この三つの区分の根拠を示してみたい。紀元前8世紀のエルサレムに「イザヤ」という名前の預言者が存在したことに、おそらく疑いはない。その活動は紀元前736年に始まったと考えられる。「ウジア王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た…」(6：1以下)。これが所謂「イザヤの召命」の記事である。その活動は、当時の南ユダ国内の社会正義の問題から始まり、歴代の王の外交政策にまで及んでいる。およそ40年間、イザヤは活動を継続し、最後の活動は701年に、当時の大国であるアッシリアによってエルサレムが包囲されるという事件に関係している。奇跡的にその時、エルサレム包囲は解かれるのであるが、そのことについてイザヤはこのように記している。「そして、娘シオンが残った。包囲された町として、ぶどう畑の仮小屋のように、きゅうり畑の見張り小屋のように。もし、万軍の主がわたしたちのために、わずかでも生存者を残されなかったなら、わたしたちはソドムのようになり、ゴモラに似たものとなっていたであろう」(1：8 − 9)。すなわち、イザヤは、エルサレムが残されたのは「ヤハウェの恵み」であり、それに応えて、イスラエルの民は神に立ち帰ることが求められていると語ったのである。しかし、実際には、その立ち帰りはなされずにイザヤは失意のうちにその活動を終えたとされている（イザヤ書22：12 − 14)。

そのアッシリアによるエルサレム包囲の事件に至る過程を散文の形で記しているのが、イザヤ書36 − 39章である。これは列王記下18章13節から20章19節と基本的に同じであり、おそらくは列王記からの引用であると考えられる。この「ヒゼキヤ・イザヤ物語」は、歴史的付記として、「第一イザヤ書」

の最後に加えられたと、従来からみなされ、40章以下が別の時代の文書である根拠とされてきた。

さて、40章以下であるが、その書き出しは有名な「慰めよ、わたしの民を慰めよと、あなたの神は言われる」という言葉で始まっている（ヘンデルのメサイアの冒頭　Comfort ye, comfort ye my people）。この慰めの言葉は、6世紀のバビロン捕囚の中で苦しんでいた捕囚民に対して語られたものであることは確かであろう。なぜなら、40－55章は文体的にも内容的にも、39章以前とは異なり、イスラエルの民の捕囚状況を歴史的前提とする時、もっともよく理解できるからである。そこにはイスラエルの王は登場しない。登場する王は、バビロン捕囚からイスラエルの民を政治的に解放したペルシアのキュロス王である（44：24－45：1）。ここでキュロスは「主が油を注がれた人キュロス」と呼ばれている。「油を注がれた者」（マシーアハ）は、後にメシアを意味する言葉となるので、驚くべき発言であると言えるであろう。

他方、イザヤ書56－66章は、40－55章と文体的には類似しているが、しかし、そこで問題となっていることは「神殿再建」と「エルサレムの町の復興」である。例えば「あなたの地は再び不法を耳にすることなく、破壊と崩壊は領土のうちから絶える。あなたの城壁は「救い」と、城門は「栄誉」と呼ばれる」（60：18）とある。これは、バビロン捕囚からエルサレムに帰還した人々を励ます言葉であったであろう。また、56章1－8節と66章18－24節は、「第三イザヤ書」の枠であり、ともに「わたしの聖なる山」というイメージがあり、内容的にも宦官や異邦人を排除しない普遍主義的傾向が明確にある。

以上のように、イザヤ書は、1－39章の「第一イザヤ書」、40－55章の「第二イザヤ書」、56－66章の「第三イザヤ書」という形で区分することは可能である。では、なぜ、それらの時代の異なるテキストや文書が「イザヤ書」という形で一つにまとめられたのであろうか。これがB.ドゥーム以来の課題であった。私は、この20年来、その問題と取り組んできたが、その成果の一端は『イザヤ書は一冊の書物か？－イザヤ書の最終形態と黙示的テキスト』（2004年）にまとめられている。その趣旨は、イザヤ書の24－27章の「イザ

ヤの黙示録」や、34 － 35 章の「小黙示録」と言われてきたテキストがイザヤ書全体を一つに結びつける機能を果たしていることの論証である。また、イザヤ書 1 章と最後の 66 章は、用語においても文章構造においても対応していることを指摘した。

そして、この「統一体としてのイザヤ書研究」は、1980 年前後から始まり（その端緒となったのは B.S. チャイルズ）、今日では一つの大きな流れになってきている。その典型的な証左は、これまでの注解書では、通例イザヤ書 1 － 39 章と 40 － 66 章は、別に扱われ、著者も異なることが普通であったが、最近の注解書においては一人の著者がイザヤ書全体を注解するようになってきたことである。（典型的には J. ブレンキンソップのアンカーバイブル・シリーズの注解書である（2000-2003 年）。また、B. チャイルズも OTL シリーズでイザヤ書全体を扱う注解書（2001 年）を書いている。）

その論拠を簡略に述べてみたい。

第二イザヤと第三イザヤが区別されつつも深くむすびついていることは明らかであろう。第三イザヤは、第二イザヤの強い影響のもとで、捕囚期に語られた預言の内容を捕囚後の状況において再解釈していったのである（例えば 62：10 － 12 は、40：3 － 4 の再解釈である。また、62：11 後半は、40：10 の最後と同一である。「見よ、主の勝ち得られたものは御もとに従い、主の働きの実りは御前を進む」）。また、第三イザヤの「召命記事」である 61：1 － 4 は、第二イザヤの 42：1 － 4 をモデルとしている（第一の「主の僕の歌」については後述する）。この捕囚後における預言の再解釈は「黙示的」と言える。関根正雄は、預言文学と黙示文学の相違は、「すでに与えられている神の言葉を新しい状況のもとで再解釈すること」であると言っている。

その意味では、第一イザヤ書の中にある 24 － 27 章の「イザヤの黙示録」と 34 － 35 章の「小黙示録」は、「黙示文学」とは言えないが、「預言から黙示へ」と至る過程にある「黙示的テキスト」である。

24 － 27 章は、イザヤ書の前方に対しては、5：1 － 7 の「ぶどう畑の歌」の再解釈をしている（27：2 － 6）。また、後方に対しては、26：16 － 18 の「産

みの苦しみ」の嘆きのテキストが、黙示的と言える66：7－9の「子供誕生」のテキストと対応している。

34－35章も同様である。この部分は「諸国民への託宣」の冒頭の13章と関係が深い。すなわち、エドムの荒廃は、諸国民への審判の象徴である。他方、34章の「エドムの荒廃」と35章の「シオンの回復」は、62章の「シオンの回復」と63章冒頭の「エドムの荒廃」と交差的に大きく対応している（エドム／シオン　シオン／エドム）。

このように24－27章と34－35章の「黙示的テキスト」は、イザヤ書の前方に対しても、後方に対しても関連性を持ち、三つの部分を結びつける機能を果たしている。また、前述のようにイザヤ書冒頭の1章と最終章66章は対応関係にある。とりわけそれは1：29－31と66：15－24に関して言うことができる（同様の宗教混交・異教的祭儀への批判）。66章は、イザヤ書全体を視野にいれた結びの章である。

今一つ、「統一体としてのイザヤ書」という視点から言えることを述べるとするならば、それは分量的にもイザヤ書の中心にある36－39章の「ヒゼキヤ＝イザヤ物語」の位置づけである。ヒゼキヤは病気になり、その中で祈りを捧げる。それは38章9－20節に記されているが、これは列王記にはない独自のものである。すなわち、イザヤ書においてはヒゼキヤの敬虔さと祈りが強調され、その病は、エルサレムの危機的状況を示唆し、その病からの回復はエルサレムの復興を指し示していると言える。この「エルサレム（シオン）」の危機と、その回復はイザヤ書全体のテーマと呼応している。従って36－39章は単なる歴史的付記ではなく、イザヤ書の中心テーマを指し示していると言えるであろう。

では「統一体としてのイザヤ書」という視点から見る時、どのような新しい知見が得られるのか。そのことについては今後の課題である。その前提として、当然ながらイザヤ書を一つの書物として読んでいた新約聖書の時代に、具体的にどのような引用がなされていたかを見てみたい。このことは旧約聖書と新約聖書の繋がりを考える上でも重要な論点である。

Ⅲ．新約聖書におけるイザヤ書引用

新約聖書においてイザヤ書は、少なくとも200回引用されている。その中には直接的な引用もあれば、暗示、あるいは言い換えも含まれる。これは、旧約諸文書の引用頻度においては詩編に次ぐものである。歴史的イエス、共観福音書、パウロは、すべて様々な形でイザヤ書から影響をうけている。しかも、それは新約聖書の中心に関わることにおいてである。

イエスは「油注がれた者」として自らを表している（ルカ4：18、イザヤ61：1）。イエスは自分の譬の語りが結果として、人々の心を頑なにすることを、イスラエルの頑なさと関連付けて理解している（マルコ4：11－12、イザヤ6：9－10）。また、イザヤ書40章以下では、「（喜びを）伝える」（バーサル、70人訳ではエヴァンゲリゾー）が五回使われ（40：9、41：7、52：7、60：6、61：1）、このことは直接・間接的にイエスの宣教活動全体の理解に関係している。

バプテスマのヨハネの登場は、イザヤ書40章3－5節によって意味づけられている（マルコ1：3と平行記事）。他方、イエスの登場は、イザヤ書8章24節b－9：1の「実現」とされている（マタイ4：15－16）。

特にマタイにおいては、イエスの生涯とその業を、イザヤ書の言葉の「実現」と見る視点が明白に示されている。イエスの誕生（1：23）は、イザヤ書7章14節の「インマヌエル預言」の実現である（但し、ヘブライ語アルマーは「若い女性」の意）。イエスの一連の癒しの業（マタイ8：14－17）は、イザヤ書53章4節の実現である。さらに、最も長いマタイの引用は12章18－21節である。これはイザヤ書42章1－4節からの引用である。これによってイエスは神の選びと霊的力を受けた「僕」であるとされるが、他方、その「僕の静けさ」には、イエスが単なる「奇跡的な治癒者」と言い広められることを避けるという意味が持たされているように思われる。また、マタイ15章8－9節のイザヤ書29章13節の引用（「この民は口先ではわたしを敬うが、その

心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとして教え、むなしくわたしをあがめている。」）は、昔の言い伝えを口実に両親への愛を失っている偽善者批判の文脈におかれている。

イエスの受難物語全体には、イザヤ書53章の「苦難の僕の歌」の影響が認められる。但し明示的な引用は多くはない。その一つはルカ福音書22：36－37で、「その人は犯罪人の一人に数えられた」（53：12）とある。

ルカは使徒言行録において、二つの仕方でイザヤ書を引用している。一つは神の言葉がイスラエルから諸国民に伝えられていくということ。使徒13章47節では、パウロとバルナバはユダヤ人ではなく異邦人の方に行くということを、イザヤ書49章6節によって根拠づけている。「わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、あなたが、地の果てまでも、救いをもたらすために」。また、それ以前に、使徒8章26－40節において、エチピアの高官は、イザヤ書53章（7－8節）を読んでいたことをきっかけに、それをフィリポが解説し、福音を告げ知らされ、洗礼を受けている。他方、使徒13章34節においては、ダビデへの約束の確かさを語っているイザヤ書55章3節をもって、イエスの復活の確かさの例証としている。さらに使徒言行録の最後28章23節以下において、パウロは、ユダヤ人の中でイエスを受け入れる者と、そうでない者がいる現実に対して、イザヤ書6章の「頑迷預言」を引用して語り掛けたことを、ルカは報告している。この引用が何を意図したものであるかという問題は難しい。但し、ルカは福音書8章の「種蒔きの譬」の後にもこの箇所を引用しているので、宣教の困難さを、イザヤ書を介して示したとは言えるであろう。

パウロにおいてイザヤ書は極めて重要な位置を占めている。とりわけローマ書9－11章にわたるイスラエルの民の救いの問題の中で、パウロは4回、明確に「イザヤ」の名をあげて、イザヤ書を引用している（9：27、29、10：16、20）。エルサレムのイザヤには「残りの者の思想」があるが、最初の二個所は、それに関係している。すなわち、イスラエルに対して神の審きがあるが、それによってすべてが滅ぼされるのではなく、「残りの者」が存在するという救いの希望である（イザヤ書10：22－23、1：9）。また、10章16節は、第二イザ

ヤの53章「苦難の僕の歌」の冒頭である。「主よ、だれがわたしたちから聞いたことを信じましたか」。そして、10章20節は第三イザヤの65章1節からの引用である。「わたしは、わたしを探さなかった者たちに見いだされ、わたしを尋ねなかった者たちに自分を現した」。この言葉は、神による救いは、ユダヤ人か異邦人かという民族的枠組みに全く依存しないことを明白に示している。このように、パウロはイザヤ書全体を視野に入れて、そこから深く学びつつ、救いの歴史について述べているのである。

主な参考文献

John F. A. Sawyer, The Fifth Gospel – Isaiah in the History of Cristianity, 1996.
大島　力、『イザヤ書は一冊の書物か？』、2004年
Ulrich F. Berges, Isaiah-The Prophet and his Book, 2012.

付記：この講演は2014年9月に西東京教区教師研修会において、また2015年1月に日本キリスト教会神学校における特別講義で話したものを文章化したものである。